

萬國新話

卷首

共五本

洋学文庫

文庫 8

C 176

1





華國新法序

橋本氏藏書印

明

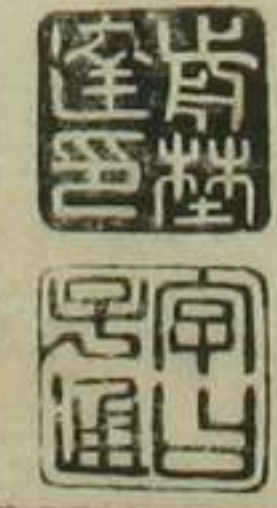
志細志之海牙國之海牙里
人物風土志也然百有二年
三作味准結心辨之料而治之
何也其之及之及世之
月之結結也其乃而海航
能事高之用而治之新殊域
之其夫志也出於此之何也

萬國新法序

以出之一出法之五釋國猶矣
亦以事之里之素者亦有不目
脉之綜之重亦也男之不
得之博物之無也出之得
小冊子之為也
竟政之有冲谷

衣庵前望廷撰

東洲 左汪虫



萬國新話序

瀛洲雜記

天之凶窮也日月星象之大入焉而顯矣
則其包括覆博之甚外勿論已通地之塊
然中處之矣止載華嶽而不重振河海
而不洩哉五大之洲萬有之國其將具
載並持而不遺焉則其廣莫豈易知
者哉是以章末之步於夏鄒衍之談
於燕或失則局或失見侈均之不獲

萬國新話 序

其實漢張騫使西域足跡不能出葱
嶺天竺之外元人窮河源亦至崑崙
而止嗚呼地其不可知也乎獨有遠西
氏之子不曠山不直地躬履度土積年
累世以致詳數乃至其道里名號風
俗物產罔記周悉歷之可據復奚
畫焉余世官瘍醫其所為聚以共者
多取諸蘭船之西齋言其物咸係西

洋諸國所出欲詳其物性辨其良苦
固漢籍之所未載將何以哉迺不忍若
世之苟承家技循舊自安者恬然置
諸不講也則勢必不得不直就而書
夫既誦其書論其事不知其地而可乎
此余之所以有翻譯萬國圖及圖說之
舉也家第中良當時在側記其誌餘
且云方及自西沙獵事相類者不圖成

萬國新話
序
編名曰紅毛雜話已刊行于世頃日書肆
來請家第曰雜話之編實千百年未聞
有若是其奇者都人士家觀戶傳施
及四方紙貴以之願為論其軼事再著
一編家第則以余之因齋疔瘍造為者
日蕃有徒曰姑舍爾而學子而從我驅而納諸
救療剗殺之後不能游息於菟園操觚
若昔日乃笑而謝之曰迺公近志存急救

濟為善汝勿馮婦望我哉答曰小人不達
大人之變一班僅窺輒昧全觀自貽編鬚
之罪雖然平素所漸積蔚矣多文何
所不富抑不入虎穴不獲虎子直探麓
中得其曾所錄悅而去也幾刻成是
為萬國新話余取而閱之雖則一時雜
錄然於其立方萬國道里名號風俗
物產庶足以知其梗槩乎則世人以家

第為攘臂下車亦所不恤也

寬政改元之臘月初六書於迎旭書

屋閑憲

桂川甫周國瑞撰



萬國新話序



坤輿大矣辟諸一器而聚
焉者多不其然乎夫羣方
所分峙萬國所櫛鬻盤河海
山嶽品物馮生埙坳乎已
不周匝紛紛乎已不密布

萬國新語 序
其由車材櫟屬而微至帽
爾而下迪以為完久者以
為利轉者直指者固抱者
式較輶擿軫鞅衡輶雜錯
糾林急交倚互持態會纏就
錫鑿金和鈴又從而九十其

儀邪即令始駕而遽御彼
將惴々予唯其目眩文彩
耳駭殷擗噦鏘之音是懼
奚暇能察夫三材庶物之
不失職與步驟折旋之比
節應樂中規矩哉迺是編

之故為推輪庫言儕俗無
峻崇難登之艱平易質樸
無眩惑聽焚之患六比諸
馬前之車矣不可字過此
以往日閑月將則豈啻殷
畝可馳百仞可登哉其周

觀八極一瞬千萬里者亦
可以馴致也夫是為序
寬政已酉之冬

槐園 宇田川玄隨撰



例引

○造物主の天地を化生くわせいと云ふ。地海ちかいを合あして一いつ此圓躰まゝと存ぞんず海うみはもつら地體ちたいの凹陷くわんこうとす所地ちの其凸たつ起おこたる処ところありて人類じんるい居いり畜獸ちくじゆ産うす。種しゆ々の草木そうぼく果实くわんじゆつを生せいず是こゝを発はつ育いくす。其地そのちを分わちて四世界しせかいとす。一いつを亞細亞あしやとす。一いつを歐羅巴おうろぱとす。一いつを亞弗利加あふりかとす。一いつを亞非利加あふりかとす。此三世界しんせかいハ古来こらいより有名ゆうめい大洲たいしゆありて完くわん辟びやくもす。既すでに久くし一いつを亞墨利加あまりかとす。我邦わがくに明應めいおつ六年ろくにんリカヘスフキロフロニテイビカ者しやは世よ界かいの既すでに其地そのちを稱なづけてアメリカとす。此れ近古きんこ開ひらけ初はじり

この地たるが。西洋めて新世界と称す。惣て
四世界の方位。各國此接壤。家兄甫周法眼
釋する所の地球圖説。小詳たるが。此書中
外に圖を設けり。

○此編は四世界此内。亞細亞沙中の雜説の之を
輯録す。日本中華ハ亞細亞中此勝地なり。
其事其説。予々萃るが以侍にあつたれども
小贅せし。其他朝鮮流虬等の如く。合小
矣。一々聞改新よむる。この省けり。

○書中の地名。皆明儒此釋字以用也。秋字たる

その國字めて書らるる。紅毛雜話此例の
如し。

○促呼合呼引呼の例上は同じ。

○此書ハ誠ニ雜書中の類本にして一書
を修めく書篋の底へお込懸し紙。或日
申椒堂の主。おくりなく探り出。して獨讀
收び。類小上本せん事。紙を。予再三いふ
ども。更ニ承引。おくりなく懐め。て去ん
さ。華夷通高。考長寄夜話。な。の冊子
紙。見とぐ。た。の御伽子帝

み。多よせらるるりもあづいなるれとそ。か
しの中ふくく諾ひやりぬ。

寛政改元季秋端午

萬象亭主人誌



萬國新話總目

卷之一 亞細亞之部

亞細亞洲の畧説

屋を車小駕ふ話

君長を斜武といふ

馬肉をくらふ話

父母が喰ふ話

葬送する人を殺す

女國の事

天下の雲圍

天竺の服飾

王の子を立ざる話

カナノール畵説

根樹の説 并 圖

哀樹の説 并 圖

安日河の事

南天竺の異

バサルの話 附 東方真珠

髑髏の臺 附 鹿角の臺

天下を戒指論する話

都見格人の畵説

護送軍の畵説 附 駝の説

莫因甬人の畵説

石小化人の話

海小橋をよる話

如徳亜の國史

テリアカの説 并 切能

死海の説

卷之二 同上

生膽酒の事

占城國の婚姻

同國の葬儀

尸頭壘の説

酒を吸ふ話

金塔の中キリキリ九頭の蛇精ヘビ任事

真獵まらうの服飾

寺てらに竈かまどなれ話

真蠟まろうの至徳

同國の人まんごん深洗ふかの事

同國の送葬

陣ぢん鎧よろいの事

同國の産婦

兄弟交合志まじりあて死しする話

天獄てんごくの事

熱油あつあぶら紙かみ抄しり子こ話

女め夫とこの仕し金かね

牛うし紙かみ喰くいいぶぶの事

揚あ枝えの事

婦め人ひと智ち恵え多たきき話

陰いん莖ぎ小せう七しち宝ほう紙かみ飾かざり子こ話

鳥葬の事

聖徳の話

卷之三 同海島之部

瓜哇紀傳

竹鎗の會の事

聖水の話

巴旦人日本へ漂流の始末并巴旦人の畫説

老人を殺す話

巴旦の甲冑

同國の家化

卷之四

象人語を解す話

桂枝をやるの事

涅槃の話

人の血を浴する事

犀象と戦ふ

舊の王の事

呂宋の地を伊西把尼亞小奪りける話

男色を禁むる説

丁子并西國米の説

食火鶏の税

唐泊浦の孫七渤泥へ漂着の語
毒の木の実の税

日本人が見世物ふはくする事

焼酒作り

イリシカトの人物

死人の首を二枚換ふる事

文節馬神の風土

同地の言語

商人の呼聲小唱物を用ひる語

同地婚娶の式

丁子并 椰子油の價

同地年中行支

燕窩の税附 黒坊及人切害せし語

喪小居者歌舞する音税

濱田兄弟智勇の事并音

附録

地中海の内羅得崑の湊口銅人形音税

明治廿六年六月紫原白ヨリ表之

萬國新話總目終

五册之内

尚古堂

杨中氏